

幼稚園児の教育

Teaching the Kindergarten Child

by Hazel M. Lambert, 1958

(2) 幼稚園における保育内容

著者は幼稚園の性格をさまざまな角度から眺めて、それを幼児の発達の特性に基礎をおき、個人差に応じた学習の場を提供するところである、と説いた。それに続けて、その幼稚園において幼児たちの営む広範囲の生活内容が九つの領域にまとめられ、次のように扱われている。すなわち、

「芸術による創造的経験」「音楽と劇遊びにおける創造的経験」「言語的な経験」「遊びとゲーム」「社会探究の経験」「健康と安全」「民主的方法の学習」「科学的な経験」「数量概念の発達」である。

全体を通じて、その扱いの基礎になっているのは、発達への認識であり、個人差の重視である。そして、それをふまえた上で現場の保育者たちから実際に要求される具体的な取り扱い方が説明されているのである。

例を二、三の領域にとろう。「芸術による創造的経験」と題された第七章では、描

くこと・塗ること・粘土・指絵・紙による製作・積木などの活動が扱われているが、先ず、それらの創造活動が、幼稚園児の生活において占めている位置と、その役割が説かれて、この領域の意味づけがなされている。すなわち、それらの活動は、幼児にとって最も自然なコミュニケーションの手段であり、幼児の人格の表現であって、言語の使用に関して成人とのハンディキャップの著しい幼児は、これらの活動を通して自身の欲求・感情・意志などの表現と伝達をおこなう、としている。それ故に、幼稚園における芸術教育のねらいは、小さいピカソを養成することではなく、これらの活動がコミュニケーションの手段であり、喜びの源とも感情のはけ口ともなり得るということをし、経験を通して知らせていくことにあるのである。

そして、この領域においても、他のあらゆる場合と同様、幼児の現在の発達の段階と、これらの活動の発達の過程を捉えるこ

とが必要とされ、幼児の描画活動の特性が、主観的経験を表現する点にある、として説明されている。それ故に具体的指導法としては先ず、幼児のもつ創造力を引き出すこと、幼児自身が技術的な正確さを求めるようになった場合にのみ技術的な暗示を与えること、材料と経験の豊かな環境を設定すること、などが考えられている。そして、これらの活動の材料についてきわめて実際ので親切な言及がなされているのである。幼児の創造活動のためには出来るだけ多種多様な材料の提示が必要であるとは、材料論の最初に著者の言っていることであるが、事実、クレヨン・絵の具・チョーク・粘土・ゴム粘土・指絵の具・鋏・積木・厚紙・のり・裁縫道具など、きわめて多くの材料についてその特色・効用と限界・使用方法・注意事項などが述べられている。

「言語的な経験」と題される第九章では、先ず幼稚園児の言語的特性にふれて、平均語い数・自己中心性・話題の具体性などが

簡単に説明され、次いで言語発達の個人差が述べてある。すなわち、社会経済的階級による発達の差・ひとり子と兄弟のある者および双生児の言語・知能との関係・社会的発達との関係など、言語発達を規定する要因を究明しようとしたデイやデヴィスらの研究を紹介しながら、言語発達も他のすべての領域同様に、各々の幼児の各々の基準に従って進行すると説くのである。具体的な取り扱い方としては、発音指導の問題・自発的発言の促進・語いの発達・聞く態度の養成・よみかきの経験・児童文学の扱い方などに論及している。これらがきわめて具体的に説明されていることは、次の例によっても明きらかであろう。語い指導に関する一暗示として掲げられている七つの簡条があるが、「副詞を使ってゲームをしなさい。子どもたちを、速く、ゆっくり、静かに、騒々しく、楽しそうに、などいろいろに歩かせなさい。」といったように実際的な方法が示されているのである。

このような扱い方、すなわち、その領域に関する発達の特性・発達段階・個人差などに論及するとともに、きわめて具体的な問題、つまり、指導技術・指導上の注意・材料の選び方や用法などを、きわめて実際に説く、というやり方は、この部分の各章に共通してとられているといえよう。

そして、手製の指絵の具の作り方や、あきかんにココナットの実を入れて作るリズム楽器の説明がなされるほどの実際性を持ちながら、これらの扱いを単なる技術指導や材料提供に終らせず、各々の活動が幼児の生活の上に占めている意義・果たすべき役割を明確にし、各々の活動を考える際の基礎原理をはっきりと打ち出している点、きわめて理論的でもある。このような実際的な記述は、読者である現場の保育者たちをどんなに利益し、また、この書物の利用度を高めることであろうが、それと同時に、これらの実際的な記述を読むうちに、ここに提示されたこれらの原理を、単なる

原理としてではなく、實際指導をおこなっていく上に欠くことの出来ない基本的な要因として、読者の側に受けとらせてしまうところに、現場のための理論的な實際書としての本書の面目がみられよう。

十三章の「民主的方法の学習」は、注目に価する部分である。他の領域とは幾分異なつて、現在の段階における幼児の必要を充たすというよりも、むしろ、現存社会が教育に要求している役割を果たすための領域とも考えられるからである。

教育の目標は、その社会が個人にどんな役割を期待するかによつて異なつてくるとする著者は、民主社会における教育は、きわめて複雑した目標を持つことを余儀なくされると説いている。それは、そもそも民主社会というのが、ひとりひとり独立した自由な個人が協力するという複雑な考え方に根ざすものであつて、ある一つの意志に従ふことが基盤となつていような専制社会とは根本的に異なつていふからである。

そして、この社会では、個々人の持つ全力をじゅうぶんに発達させ、独立の人格と自身の行為を自身で責任をもつて決定し得る力を持つた創造的な人間が要求されている。学校は常に、これらの民主社会における生き方を訓練する場でなければならぬのである。

そのために、幼稚園は幼児自身にふさわしい程度に自己の行為を決定することを学習させねばならないと著者は説いている。そして、それは問題解決場面において、幼児自身が経験することによつて発達させ得るものであり、教師はそれを適当な助言と暗示を与えたり、場面を提供したりすることによつて、助けねばならないのである。幼児たちのなし得る決定の程度が例にひかれてはいるが、それはきわめて具体的に身近なものばかりである。

加えて、幼稚園は幼児たちに、集団によく所属してその中で満足する経験を与える必要があるとされている。そして、よい集

団生活のためのしつけは、成人の側からの強制としてでなく、幼児自身の行為として、さまざまな遊びや仕事の中で体得されていくべきものである。しかし、幼児たちは、この幼い集団生活において常に成功するとは限らないから、責任ある集団の一員として行動する場面や、それに対する感受性を養う機会は、くり返し提供されねばならないとされている。

結局、民主主義が幼児教育に要求するのは、簡単に到達し得ぬ目標であるが、要は個々の幼児の人格を尊重し、個々の幼児のもつ興味と能力を発達させていくことが学校の役割であり、個々の幼児たちに集団成員としての経験を与える場合にも、ひとりひとりの独自性を集団の中に埋没させぬよう配慮せねばならないのである。

以上のように、幼児の生活内容を九つにまとめて、各々の領域を意味づけ、その扱いを述べているのであるが、考え方の基礎を、幼児の発達におくと同時に、民主社会

に対する適応を狙っている点に、半世紀來の米國教育界の傾向がうかがわれて興味深いものがある。

(3) 幼稚園に関するその他の問題

本書はさらに、「特殊児童」「学校と両親と地域社会」「新入学に関して」という三つの章を設けて、幼稚園教育の上で見逃し得ないこれらの問題をとり上げている。

特殊児童とは、情緒的に、あるいは社会的・知的・身体的に、何らかの点でハンディキャップを持つ児童のことで、その数はその判定の困難さの故に、決定的なことが言い得ないとして、二、三の報告が示されているが、要するにこれらの子どもたちの数は少なくないわけである。

そして、この子どもたちに対する特殊教育の必要性を力説して、現状ではきわめて少ないけれども幼稚園ほどそれをよくおこなひ得る場はないこと、その教育は早い時期からおこなわれるべきものであること、その障害が恒久的なものであれば普通児と

別に教育することが効果的であること、などが主張されている。

そして、問題行動をなす児童、知能・視力・聴力・言語能力に欠陥のあるもの、肢体不自由児、健康に問題のあるもの、など各々の障害児童についての説明と、教育の要点が述べられている。

次の章では学校と地域社会との関連、および両親との連絡が説かれている。教育が生活的に営まれる時、学校は地域社会と没交渉ではあり得ず、学校と地域社会の相互的な交流が望まれるのは当然であるが、地域社会は学校に理解と助力を惜しまず、学校は地域社会に対して奉仕を怠るべきではないことを説き、加えて、幼児たちも地域社会に対してささやかな奉仕をなすことが出来るとして、都市の美化のために、植物や種子を集めるのを手伝う、といった例が挙げられていることは、教育と実生活的行為との密着を思わせる興味深いものがある。

さらに、父母の会の持ち方、個人的な面

接・家庭訪問・家庭への通信法などが具体的に説明されている。

最後の章では、第一学年への進級をスムーズにおこなわせるための幼稚園と小学校低学年との交流を説き、さらに第一学年における学習を容易にするためのレディネスについて、その概念を説明し、さまざまな角度からその要因を分析して論じている。

以上、本書の概要を紹介したわけであるが、全体を通じて、児童の発達に対する認識の重視と、デューイの教育哲学が、明確な支柱として本書の論旨を貫き、これを支えていることに改めて気づかされる。著者は、米國の幼児教育界の安定した思想的基盤の上に立って、着実な筆を惑うところなく運んだものとみなし得るのである。

なお、引用文献の明示とともに、各章ごとに参考文献が掲げられているが、幼児教育関係の外国文献を知る機会の少ない私どもにとり、うれしいことに思われる。以上

(尚絅女学院短期大学・本田和子)